

韓国の海藻群落調査旅行

谷 口 森 俊*

M. TANIGUTI: My visit to Korea

1968年6月6日午後5時、下関港を定時に出港した九州郵船KKの日韓定期船韓水丸（850トン）は、船客僅か8名をのせて一路釜山港に向った。船客内訳は日本人2名、英国人1名、韓国人5名。日韓条約が1965年に締結、国交が正常化されて未だ3年しかたっていない。そして今国際緊張下にある韓国に出張するわけである。終戦後韓国を訪づれた日本の植物研究者としては私が初めてだといっていた。

波は極めて静かであり、うねりも殆んどない。私は何時のまにか寝てしまった。

翌7日朝。船が止まったので事故かと思って飛び起き窓から見たら、もう釜山港外に到着した。時計を見ると4時30分である。あまり早いのでびっくりした。すっかり夜は明けていた。1等船客は私1人のため話相手もなく、自分で韓国旅行のガイドブックを読み直したりした。しかし実際に行って見ると随分違っている所があるので、それらの訂正をもちかねていろいろな手続きその他を一緒に記述していきたい。終戦後の海外出張もこれで3回目のため自分ながら要領も覚えたつもりであるが、しかし初めての国だとなんとなく緊張するし、そして他とは又一寸違うところもあり、新たにミスもやはりする。

朝早いいためそのまま港外で停泊。釜山の山や家、工場の煙、汽車の汽笛、大小船の往来等が異国へ来た喜びと、日本脱出の喜びを感じさせてくれる。午前6時30分検疫官が乗船してきたので、サロンで検疫。それが終って8時0分入港、第1埠頭に接岸した。下船するとすぐ前の建物で入国審査、その横へ銀行が出張していたからUSドルを韓国のウォンに換えた。このとき赤い証明書をくれる。次に税関の手荷物検査。いずれも割に簡単にすんだ。ただ雑誌、印刷物は詳しく検査する。外に出てすぐタクシーで郊外にある海雲台観光ホテルに向った。タクシーはかなり沢山いるからすぐ乗れる。2、3人ドルをもっていないかと日本語でいって近寄ってきた大人や子供がいた。

海雲台観光ホテルは海岸のリゾートホテルで、すぐ目の前に海がひろがっている。荷物を置いて少し休み、11時頃から早速調査に出掛けた。ホテルのすぐ前の波打際には沢山の海藻が打上げられている。アナアオサ、カジメ、フクロノリ、アカモク、ツノマタ、ミル、オオバモク等。志摩半島や伊豆半島に似ているような第一印象をもった。ずっと砂浜

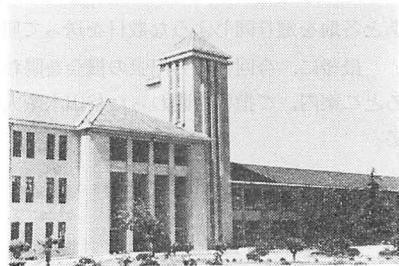
* 三重県立大学水産学部

The Bulletin of Japanese Society of Phycology, Vol. XVII, No. 1, 50—52, April 1969

で海水浴場になっている。北の方へ行くと大小の転礫があり、その向うには突堤があって漁船が若干いた。この突堤上にタンバノリ、マクサが沢山採って干してあった。突堤左つまり外側は一寸した岩礁地帯となっている。ここでは潮間帯で上から下へフクロフノリ帯→イワヒゲ帯→ヒジキ帯が帯状分布を作っていた。日本の温帯と全く同様ヒジキアアラメ群集の分布領域であることが判ってまず嬉しかった。突堤内側の転礫上にはアナアオサとアオノリが上下に密な帯をなしていた。

ここで海雲台について一寸述べておく。ここは温泉場であるが、日本の観光案内では海雲台観光ホテルが1軒しか書いてないが、実は40ほど大小のホテルがある。夏向きの避暑地で、もっとも大きいホテルは最近できた7階建の極東ホテルで、海雲台観光ホテルはその横で3階建である。その他第一ホテル等がある。値段も高いのから安いのまでいろいろある。私の泊ったホテルではバス、トイレ、テレビ付シングル洋室で2800ウオンであった。1ウオンは約1.4日本円である。食堂、土産物店、ナイトクラブ、ゲームルーム等の設備がある。すぐ横へ大きいのを増築中で、カジノ等もあるようだ。いろいろなデマを日本で聞いて行ったが、誤っていることが多い。汽船の中でも、ホテルの部屋、食堂、大学の中、喫茶店等でニンニクのおいしさは全くない。また食堂では米のご飯があるから心配ない。ただホテルの食堂でも町の中の大衆食堂でも味噌汁はない。一寸口にあわないような汁だが、注文すれば作ってくれる。ホテルでも町でも日本語がよく通じるからこれも安心である。若い人の大部分、学生、店員等は全く日本語はできない。ホテルの前の遊歩道は一日中人通りがたえない。出店もずっと列んでいる。パン、キャラメル、ガム、カステラ、ジュース、ゆでタマゴ、サイダー、ピーナツ、ドーナツ、栗マンジュウ何んでも売っている。ただインフレで値段は高く日本の1.5～2.0倍だった。それからテレビは福岡のNHKと民間放送が入るので、ニュースや対馬、壱岐地方の天気予報等が判るから都合よい。

6月8日朝10時頃、ホテルよりタクシーで釜山水産大学に行った。バスもあるが、字も言葉も皆韓国語であるため単独では乗れない。釜山の市内電車は本年5月28日に廃止になって線路だけが未だあった。また市内外に警官が非常に多い。そして本年1月以来小銃を背おっている。タクシーで行く途中やはり警官の不審尋問をうけた。別に何もなかったが、パスポートは必ず持っていなければならない。水産大学について植物学の姜梯源教授に劇的な対面をした。海辺に建つこの国立釜山水産大学は、戦前の釜山高等水産学校である。戦後建物の増築、学内の機構改革等種々の変遷をへて現在に至っている。いま漁業、機関、製造、増殖、水産経営、水産教育の6学科ある。私は各研究室、図書館、製造実習



釜山水産大学の本館正面

室、一般教室等を見学した。研究中の浮遊性多毛類の分類、ウナギと輪虫の研究、食用魚粉実験、魚病等の話も聞いた。

午後は釜山港南側の大宗台公園地先へ姜先生と調査に行った。大きな規模の岩礁地帯である。潮間帯では上から下へ、ボタンアオサ帯→ヒジキ帯→モ (*Sargassum*) 帯→ツルアラメ帯を確認した。ヒジキもかなり多い。ツルアラメは非常に多い。丁度本州中部太平洋岸のアラメ帯の相観と全く似ている。ツルアラメがこんな浅い所に見事な帯を作っているのは全くすばらしい。富山湾や能登半島等でもこんなことはない。タイドプールにも海藻が豊富である。すなわち、ウミトラノオ、イソムラサキ、サナダグサ、ツノムカデ、コメノリ、ツルツル、タンバノリ、ツノマタ、ピリヒバ、ハバノリ、フシツナギ、アナアオサ、ボタンアオサ、アオノリ、カヤモノリ等（詳細は後日別報予定）。なお、この公園一帯は半天然性のクロマツ林でおおわれ、コナラ、クリ、エゴノキ、サルトリイバラ等を混じり本州と似ている。ただ林床にコシダやウラジロはなかった。帰りに釜山市内を少し見たが、街路樹は大抵プラタナスであるが、一部に柿の木があったのは珍しい。

6月9日(日)午前11時よりホテルの北、徒歩30分の海雲台中洞にある釜山漁業協同組合わかめ培養所へ姜先生と全南莞島漁業組合技師2名と私の4人で行った。約40分ほど説明を聞いたり見学をした。ホテルへ戻って昼食、4人で意見交換をした。午後は釜山水産大学付属臨海研究所へ行った。ホテルより南へ1000mほどの所にある。1966年2月1日開所になった鉄筋2階建の堂々たる建物である。所長の李秉暎博士にご挨拶をしてから所内を見学した。スタッフは、所長1、専任講師2、助手1、大学院学生4、事務職員7である。その他に20トンの採集船とその要員5がある。1階には所長室、事務室、研究室、飼育室等6室が、2階には図書室、標本室、客室、講堂、研究室等10室がある。現在トラフグの発生、コウライエビの発生、種苗生産、海産動物の組織、発生等の研究が行なわれている。この研究所の前一帯は岩礁地帯で、ここでも海藻群落の調査を行なった。イワヒゲ、イロロ、イシゲ、カイノリ等を多量に確認することができた。次の日には山手にある東萊観光ホテルに移った。冬向きの温泉場であるため、今度は静かであった。このあと各地を廻り同じような数日を送って無事帰国した。

最後に、今回の海外出張の機会を賜わった公州師範大学の崔斗文教授、現地であらうとご案内、ご指導を賜わった釜山水産大学教授姜悌源博士に、心より厚く御礼申し上げます。